



俊太郎逝く木枯に澄ます耳 佐藤映二
 お披露目の仔牛を梳くや初松籟 有手 勉
 寝静まる鬮體や返り花真つ赤 竹岡みち子
 寂しさは化石の白さ凝こり鮒なま 山崎和之
 学校の灯りてゐたる霜夜かな 宮坂やよい
 ハロウインの海辺や犬の譲渡会 齊藤すみれ
 寒牡丹開けば星の入るらし 吉澤 清
 银杏を踏む遊女らは地に眠り 太田 薫
 戦渦の子叫ぶ声かも石榴割れ 寺島芙美子
 枯葉舞ふ万の翼を持つごとく 菅原砂登子
 フランスポンこんがり焼けて討入日 竹野入美奈子
 黒潮にマンタのゆとり年惜しむ 穂苅真泉
 白粉婆おば蔭かげまる 柚の鏝えん絵蔵 山田一政
 花終杖手ばなせぬ青年と 三村惇子
 *
 白息に言葉を入れぬ二人ゐる 木幡忠文

刺青の龍の喜ぶ柚子湯かな 西澤日出樹
 冬至なり雲より大き神おはす 岩上諒磨
 暖冬や維い那なの歩み厳として 井出恵子
 立冬や硝子のごとき民主主義 栗原利代子
 箕み祭まつりや前齒欠けたる主人公 二木 暖
 鉢巻をして義士の日の試験受く 篠遠良子
 息ひそめ世を見詰める冬の蝶 神作仁子
 弱き吾は強き炬燵に食べられる 菊池理津子
 ないものはないとばかりに着ぶくれし 高橋秀雄
 狐火の屯している歌舞伎町 坂本君江
 雪深しパラサンガターまた一步 土屋 隆
 银杏黄葉滴のやうに教会は 鈴木啓子
 枯木きてすれっからしの日がぬくい 松本よし乃
 天狼の揺るがざるカカ・ムラドの忌 松井 弓
 栗祭貧しき人の豊かな目 上脇邦子

巻頭言 気づいていますか。選句に多様性を持たせたい。一月号から選句の幅を広げている。「岳集」投句は六句。従来は優れていると私が判断したぎりぎり四句が巻頭に並んだが、今年から五句、注目句を選んでみる。

創刊以来、人間を含めた自然との対話を通して新たな挑戦がみられる優れた作品を推奨してきた。その見方は変わらないうが、言葉と言葉の整合性、照応性を厳しく攻めることから、もう少し自由な言葉の多様性を生かした「あそび」に注目したい。現代は、まさにそんな時代に差し掛かったのではないか。しばらく選句の基準を新たに構築したいと思う。

元日の新聞で恐山菩提寺院代南直哉禅僧の文章に接した。言葉は器であり、中に感情という液体をいれることで、自分の言葉が生まれるという。謎のような言い方になるが、例えば「さみしい」という感情を「さみしい」という言葉の器に入れたらどうか。俳句で目に見えるように具象化するには、器そのものの言葉を考えることから始まる。

短詩型の俳句の究極は器と感情とが一つになった具象的な言葉の発見に独自さが現れることにある。

わが家からの今朝の日本アルプスは白雪が緩んだのか山壁が手近にぐっと迫り、美しい。しかも壮大な寂しさもある。

私の「鷹」在籍時代、論争もしたが、仲がよかった。ふとフランス文学者でもあった彼を思い出した。詩人ボンヌフォワの紹介者としても名高い。竹岡みち子はクール。詩的だ。ハロウィンの海辺や犬の譲渡会 斉藤すみれ

諸聖人の祝日の前夜（十月三十一日）に行われる祭。アメリカの祭だ。その昼に海辺で犬を譲る会が開かれる。祭とは直接の関わりはないが、いうならばアメリカ的。さばさばしているのが、日本のじめじめ風土とは違う。作者の居住する逗子海岸辺りか。自在さがいい。

今月の秀句

寂しきは化石の白さ凝鮎 山崎 和之
鋭い。考えている。寂しいという感情を「化石の白さ」と具象化した。これは見事だ。古来、寂しさとは何かと、どれほどの人が具象化を試みたことか。日本でも中世の西行などは「さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵ならべん冬の山里」（山家集）と詠んだ。作者も挑戦したのである。寂しさは色では白、それも年月を経た化石の白さとは当然くすみもある。そこに、ゼラチン状に魚肉が凝った「凝鮎」が微妙につく。しかも、寂しさの象徴のようで、完全な象徴でもない。ずらしている。実在感がある点で琵琶湖あたりの鮎の地貌をとどめる。作者の代表作になろう。先述した私の言葉の器「さみしさ」に「さみしさ」という感情を入れる、その答えのようだ。

詩人谷川俊太郎の死を悼んだ俳句がどうと寄せられた

俊太郎逝く木枯に澄ます耳 佐藤 映二
死して木枯になった詩人。木枯が「ねたね／うたたね／ゆめみたね／ひだね／きえたね／しゃくのたね」（たね）。こんな吹き方はしないか。耳を澄ませば、聞こえるかな。
お披露目の仔牛を梳くや初松籟 有手 勉
能登であろうか。生まれた仔牛に櫛を当てる。お披露目とはめてたい。新年初めて響く松風の音も野趣に富み、相応しい。鄙暮らしの細やかな欲びに诗情がある。

学校の灯りてゐたる霜夜かな 宮坂やよい
夜学だろうか。あるいは先生方が忙しい二学期末を迎える。「霜夜」がしみじみ、寒い。霜はロマンよりも生活感が滲む。生きている実感が迫るのである。明るい母音Aの連なり「学校」から沈んだ母音I・U「灯りてゐたる」、さらに大らかな母音O・A「霜夜かな」へ。リズムが美しい。

寝静まる靨や返り花真つ赤 竹岡みち子
画家のシーンとした夜のアトリエか。どきっとする。陰画の世界。特殊な世界を描いている。われわれでも日常の裏側にはみんな陰画の世界を持っているんだよと平井照敏が言っ

寒牡丹開けば星の入るらし 吉澤 清
風格がある。中国大陸文化を背景にした寒牡丹に寄せる思慕の一途さ。日本を代表する書家の一人吉澤大淳先生のさりげない囁目句に、たかが寒牡丹とはいえ、そこに虚空の存在を思わせる手妻がある。

銀杏を踏む遊女らは地に眠り 太田 薫
銀杏を踏んだのは私。ふと近くの寺にある遊女墓を連想した。私にも松山の一遍ゆかりの宝蔵寺での同様の体験がある。近くの遊郭の遊女が一握の石と化して投げ込まれた墓を見て、うたた無量。現代と江戸時代とは陸続き。生と死との橋渡しが巧みである。

戦渦の子叫ぶ声かも石榴割れ 寺島美美子
世界が戦場。戦渦に向かう姿勢から、割れた石榴の血が溢れる歯ぐきの連想へわがこととして及ぶ。真面目さが一途。
枯葉舞ふ万の翼を持つことく 菅原砂登子
気合いがいい。風に舞い上がる枯葉の大団円の舞台表現がお見事。枯葉の死とは生きる自然の内なのである。死は死人の世界ではない。生きている者が問う世界だ。

フランスパンこんがり焼けて討入日 竹野入美奈子
現代人のフィリング。討入咄は血も火も話題になろう。物語である。物語はちくちくと生活を刺激する。パンの焦げ具合くらいに。これも軽いユーモア俳句。

黒潮にマンタのゆとり年惜しむ 穂苅 真泉

船乗りの惜年の思いとは、漂泊感がある。生きるスケールが大きい。南の海に出没するマンタの遊泳を見て今年も暮れるとの感慨には、人生無常を超えた時空の広がりがある。期待の大作であるが、どこかマンタの遊泳が楽しいらしい。そこが大物の所以。期待期待。

白粉婆 蕨まる 柚の 饅絵蔵 山田 一政
「白粉婆」は綿虫の異称。妖怪を思わせる。柚が饅絵の蔵に住んでいるのも愉快。綿虫も妖怪とはいえ、屁みたいなものだ。作者が住む秋田はまじめ過ぎ、私には現代の妖怪風土と思われる。

花棧杖手ばなせぬ青年と 三村 惇子
障害者であろう。青年に思いが深まる。作者の母性愛を超えた博愛に感動する。

7月の書評

暖冬や維那の歩み厳として 井出 恵子
維那とは寺の総括、庶務を扱う僧。禪宗では「いのう」と呼ぶ。歩みも威厳がある。なぜ暖冬か。この付かず離れずの呼吸の広がりがある。日常を捉えている。論理という理屈がない。それだけに僧侶の佇まいが見えるようだ。周りの対象に接する仕方が巧みになってきた。センスがいい作者。

効率はかりにきりきり舞い。余裕がない世紀に入った。独裁を待望する思考放棄の乱世である。見識ある為政者が退場し、欲望ばかりにうつつを抜かず似非政治家が蔓延の時がきた。しかし、民主主義の本質は硝子ではない。粘りだ。山芋の粘りこそ地貌の知恵を発揮する時が来る。

箕祭や前歯欠けたる主人公 二木 暖
箕祭は収獲祭。欠けた前歯が愛嬌、にっこり笑う。人柄が抜群な人物なのであろう。人がついてゆく。箕祭は日本なのか、あるいは作者が留学したフランスの葡萄生産者の祭か。古い役者宇野重吉のような役者がひよいと思いつかぶ。

鉢巻をして義士の日の試験受く 篠遠 良子
これは真剣勝負。大学受験か。世が変わったのである。やがて企業戦士が誕生するのである。

息ひそめ世を見詰める冬の蝶 神作 仁子
古木の陰や積んだ薪の隙に身を隠して春を待つ冬の蝶。「世を見詰める」とは分別がある。これは冬蝶に仮託した人と思わせる。意外に厳しい一言を秘めた人物像である。

弱き吾は強き炬燵に食べられる 菊池理津子
この強引な人間臭い言い方に惹かれる。すぐ炬燵に入る。方言でいう「いくじなし」。むしろむしろ炬燵に食べられるとはなんと下手な素朴な言い方か。あれこれ言い回しを考えたのであるが、巧くない。これでいけとの思い切りがない。ないものはないとばかりに着ぶくれし 高橋 秀雄
立ち上がる。百キロの肥満児風。そのさまがまるでお薦さ

やさしさ。これ以上のやさしさはさて何である

白息に言葉を入れぬ二人ゐる 木幡 忠文
四十代半ばの青年である。東京足立区在住。ひそかな作。これ以上一言は要らないであろう。並んで白息を吐いている。白息は無限。当然思うことはあるが、言葉として声に出せば、言葉は器。液体である思いは限定される。したがって無言。無言とは初々しいと同時に不安も夢もある。ナイーブな作者にどきどき。本誌との出会いは昨年九月から。

刺青の龍の喜ぶ柚子湯かな 西澤日出樹
漫画では平凡であるが、やはりドラマがある。背中に納まっている龍には柚子湯の解放感が嬉しい。遊びへの関心が俳句初学からある作者。どこか迷いがあり、もう一つぐいぐいと進めないのでもどかしい。そこが現代青年のモラトリアム風なやさしさでもある。今年はこの調子でひと暴れ。松本近郷善光寺西往還筑北乱橋在住。最高に巧い米を作る青年に期待期待。

冬至なり雲より大きき神おはす 岩上 諒磨
言葉の選択が実に巧い。昼時間が短い冬至。太陽系の自然の営みであるが、すべては神様の計らい。空に雲が出た。明るい。お日様の方がちよっとだけ大きい。真面目に想像しながら、理屈で飛躍しない。実感に従い、頭に任せないで、目や耳で捉える。写生が名人級。諒磨の時代になりつつある。
立冬や硝子のごとき民主主義 栗原利代子
壊れやすい硝子。アメリカを先頭に世界中が経済の手早い

ながら。何でも着込んでいる。妻の切れた腰巻、穴が開いたパンツ、膝がない寝巻。いっさいがっさいがある。おお寒い。作者の得意領分を想像した。本誌新同人である。
狐火の屯している歌舞伎町 坂本 君江
新宿歌舞伎町とは狐火の町。次次に狐火がゆらゆら。これぞ唐十郎、腰巻お仙のふるさと。

雪深しパラサンガテーマた一歩 土屋 隆
般若心経の一節が「パラサンガテ」。作者は最高の企業人にして愛妻を亡くしてより経文の研究に打ち込む。俳句表現の省略のコツを会得したか。

銀杏黄葉滴のやうに教会は 鈴木 啓子
滴とは教会の銀杏が散るのであろう。神様の雫。想像させ余地が深い。表現力があり、注目。名古屋在住の作者。
枯木きてすれつからしの日がぬくい 松本よし乃
冬枯れの林中をさまよった寸感を身に纏う方言で呟く。それだけで表現が作品になる。

天狼の揺るがざるカカ・ムラドの忌 松井 弓
中村哲忌は十二月四日。アファガン農地復興の恩人である。永遠の天狼星として記憶される。
栗祭貧しき人の豊かな目 上脇 邦子
府中市大國魂神社の祭を栗祭という。武蔵野の栗を徳川家に献上したことから江戸時代以来の祭。武蔵六所宮太々神楽が名高い。栗は救荒食物。貧しい人々の豊かな目とは気持が和む。底辺からの発想が胸に沁みる。